

# 虚の符

洪水企画 2017.7.10

ソラ  
イカダ

http://www.kozui.net

## 19

### 帰路 小島きみ子

天鷲色の服を着た、ちいさい兄が  
早口のひくい声であなたを呼ぶ  
坂道の繁みで囁っていた小鳥のように  
もうだれも住まない家の  
樫の木だけがどんと伸びて電線に触れている  
だれを呼んでいる だれに呼ばれているのか  
あなたの声がする  
ヒオウギはね オレンジ色の花が咲くよ  
暗黒の笑ができるまではね  
染め織りした桐の花の帯を締めている写真  
鯉ぶとは慈しむことで  
面影が現れる  
遠い処で やわらかな白い胸をあらわにして  
生まれたばかりの赤ん坊に乳をくれているあなた  
夕陽が眩しくて 目をつむっている兄  
もう行かなくちゃね  
あなたは黙ってわたしの背中をなでる  
行かなくちゃね

### 飛鳥山 平井達也

北とびあ十七階の展望ロビーから下界を眺めている。さつきまでいた飛鳥山公園が見える。公園にいたときは気持ちよく空が開けていたのに、ここからは全く樹々に塞がれているように見える。建物の中と似ていなくもない。屋内にいると天井の存在なんて意識しないけれど、客観的には空に開かれていない。  
公園に沿って線路の東が延びる。京浜東北線のかず宮線、高崎線、湘南新宿ライン。しきりに長い電車が走る。単独であるいは並行して。それらが蛇に見える。私たちは身体の外に蛇を飼っている。街が私たちの精神の庭なのだしたら、庭に精神の蛇を飼っている。  
王子に住んだことがあるはずだった。それがいつなのかは思い出せない。飛鳥山公園の紫陽花に埋もれ眠っていた。精神の蛇に乗って出たきり忘れた。それからはずっと天井がある暮らしをしている。建物の中で秘密を守るのを最優先する毎日。見下ろす王子の街でプリウスが信号を守って停まったり動いたりしている。  
天井のないところに行きたくなくて展望台を離れてエレベーターに乗る。下降する。北とびあから出て振り返ると北とびあが病院に見えた。紫陽花みたいな腫瘍を切除してきたんだろうか。家に帰るのに京浜東北線に乗るほか、都電荒川線を使う手もあるの迷う。あるいはもう一度飛鳥山に登ってみようか。



### 駅長 二条千河

駅前通りの中ほどの  
おかあさん一人で切り盛りする惣菜屋へ  
駅長さんは毎日のように  
お昼のおかずを買いに行く  
ずいぶん前に奥さんを亡くして以来  
家事全般をそつなくこなしているけれど  
お弁当作りだけはどうも気が乗らなくて  
煮魚と、きんぴらと、大根サラダ、  
それに家から持ってきたおにぎり二つ  
待合室で新聞を見ながら食べて  
午後の仕事はまず鉢植えに水を遣ること  
惣菜屋のおかあさんには中学生の娘さんがいて  
放課後はいつも店に寄る  
一口コロッケをおやつ代わりに摘んで  
大抵はすぐに家へ帰るのだけれど  
ときどき待合室に顔を出すこともある  
別に何を話すでもなく  
ストロップの前の丸椅子に腰掛けて  
図書館で借りてきた絵本を  
日が暮れるまで眺めていたりする  
将来は絵本作家になりたいのだと  
いつかぼつりと教えてくれた

娘さんは電車を見たことがない  
廃線になるといふ噂を聞いたのは  
彼女が生まれるより前の話だ  
その後これといった話題にもならず  
いつのまにか時刻表が真っ白になり  
看板の駅名も煤けて読み取れなくなった  
もう車輪が走ることのない線路の上を  
駅長さんは毎朝きれいに掃き掃除する  
電車の来ない駅を駅と呼べるだろうか  
しかし仮にここが駅でないとしたら  
駅前通りなんてずっと前から存在しなくて  
惣菜屋もおかあさんも娘さんも  
何もかもなかったことになってしまう  
それではなんだか申し訳ないの  
駅長さんはいつまでも駅長をやめられない

### あまのかわ 文月七日に 海望今日子

あめ、あま。もとはおなじだったという  
ほころびから、したたつてよ  
そのら、たとえば、ながれ  
宝石のように、しずくです。ほしつぶですから  
さんざめく、ふりそそぐのは、いつでも  
みずだ、みつめてよ  
七夕の笹の葉で、笹舟をつくつた  
あの子に、おくれますように  
たいせつな、まるまっつて、ぬれたもじです  
うんだことはないので  
それとも、あめの、ふねにのつて  
ふみづきですから、ことさらに、ときぞうで  
やりとりたちが、みおくります  
かわらで、いしをつむ、つづる  
なら、かこうでは、どのもじが、かわこうとした？  
笹舟は、急流がよく似合う  
すぐにしずみ、またうかび  
明滅のよう、だからこそ、くりかえすのでしょう  
ほとぼしつて、かれやんで  
みずにならぬことこそ、いつもほんた  
あまい、ひびき。ああ、いるみたいで  
ほころびが、かわきますか、いえ  
ふみづきですから、こぼれません  
こんなふうな、あの子  
あまの、きしべで、会えたみたいに似ていたの

つんだいしが、もじ、つぐむ、ことが？  
笹舟にのせ、どうか、おくれますように  
くらいです、ほとりでした。しずく、いとしい  
つぶ、つぶ、みつめることで、ふるだろう、かしら  
うそのように、つむつたふみで、ますますあかるい



### 星降る夜には 神泉 薫

幾千もの  
星降る夜には  
青い山並みの向こうに  
ひとりひとりの物語が息づいている  
舞い降りた天使たちはそつと見守る  
ひとしずく  
ひとしずく  
地上に降り注いだ  
かけがえのないイノチの旅を  
広やかな羽をはためかせ  
ひかりの言葉を振りまきながら  
やさしく  
やさしく  
励まされる  
連なる山々のほざまから聞こえてくる  
日々と夕名の梢のざわめき  
喜びと悲しきは風に舞い上がり  
春夏秋冬  
四季をたどり  
海をなぞり  
川をめぐり  
きらめく星へと届けば  
遠くへ  
遠くへ  
誘われる  
わたしたちの瞳  
晴れやかに  
かやく



### 友が 坂多瑩子

東南がいちまい窓で  
そんな施設に入ったから  
遊びにと  
友はじやういち身室  
象が昼寝できるほどの  
おおきなへやがいいと  
北のもの入れは  
仕切りも  
箱もないから  
ものすくく  
不経済な収納で  
大きなふうせんが  
みつつ  
とびらあけたら  
ふわり  
でてきてもおかしくないね  
紅茶すすつて  
それから  
とりとめのないものと  
へや中走りまわつて  
あれから  
友  
どこにもいない  
西日のあたるドアの前で  
象が  
あくびをしていた

### ラスト たなかあきみつ

ラスト(これが「パロディ的狂騒」の劇中のラストシーン  
なのではない、これは粉末のRたる先導獣のラストの痕跡で  
冷めきったたんまりL字形三匹の激情的関連施設だ  
《ラストベルト》というタイトルに  
ようこそ眼球も錆びつく、工場群のdoorsのドアノブのうろ覚えの  
鉄錆をさら半開きで舐めていくテレビカメラの差し出す  
画面上で、さらさら滞留しては反転する時間に何層も果てう闇の埃  
《忘却の靴》をはいて錆空間を彷徨する  
時間の埃はレンズ面でも錆びる、ましてや半透明のガラス面でも  
錆びた粒子よりし画面の錆と眼球の錆(「グリッド・ヴェール」  
)あからさまに擦れあい錆の耳もとじやりに寄りつった砂利の  
灰色の果てまで灰色のグラデーションの角を突く  
一陣の風の開弁は内心の(鶏卵の)真紅のケープで  
空間を浮遊する錆また錆を撃すすし模様様の目をマクラーメンんだ  
やおらメディアに登場した《ラストベルト》の所轄の市長は  
見た目に青っぽい作業ズボン姿でこう嘆く、  
《工場内のおんぼろ設備の残骸を  
きれいに撤去する費用なんて全くなありませんよ》と  
それゆえ錆、錆、錆の氾濫はほとんど出血して黒ずむばかり  
このフィルムを取納した荷物には  
公的に「E型」すなわち発掘品のお詫ひの《正誤表》ではなく  
念のため可燃性の壊れものを告知するラベル  
もちろん剥き出しのままでの郵送は厳禁だ  
スティールの錆びた地肌をa burning sculptureの痕跡と  
みなせるか、要木枠の壊れものとしてのfragileという  
ブロック体の字幕の文字たちは、  
菌糸状の眼にも胸な高圧線の鉄塔  
青靄がめぐる水道橋のように燃焼材を、翻訳すれば  
放火魔のびらびら焚きつけるほら(a pyromaniac game)を呼号する  
フィルムに定着された炎上する炎の塔をそのまま大気圏外へと  
たとえばプランクシーの宇宙へ伸びる。鉄塔を燃焼させたらどうか  
放火魔のゲームであれ pyromaniac とビー音が先導することに  
変わりはない、鞭打ちの壊れやすい fragile という文字たちの  
かつてのエルテの装飾性をかなぐり捨てた裸形の炎が  
いきなりガソリンを浴びてフィルム内で揮発を重ねる  
ヴェルフリに葬送の造語詩篇の単調な音声や音律が際限もなく響く  
その会場で唇を逐一弾いてひたすら読唇しようとする  
破壊のパナーの唇を

### étude 四肆舞 157/158 池田 康

巫々々と笑う女には会いたくない  
誰かされるに決まってる  
しかしさつと会うだ巫々々と  
と笑う世にも恐ろしい魔に  
巫々々の中にすべてがあると女は言う  
そんな馬鹿なことがあつてたまるかと抗つても  
紅い柔らかな唇が巫々々と笑えば  
言葉は力を失い地にちらばる  
なにおかしいのだろうか  
笑う種などありはしないのに  
この世もあの世も虚構も真実も  
彼女には「昨日の三面記事」  
巫々々と笑う女が考えている  
爪にどんな色のマニキュアを塗ろうか  
デザートになんのアイスを食べようか  
食べ終わったら世界を滅ぼしてまた巫々々と笑う  
⑮⑧  
夢は頭痛となつて残る  
頭痛が顔を洗う  
頭痛がランチを食べる  
頭痛が夕焼けを見る  
あらゆる夢は頭痛となる  
数学者が二百年前に証明した公式である  
夢と頭痛はイコールであり  
全世界の小学校の教科書に載っている  
夢は病気だから気をつけろと国語の先生は言う  
頭痛が出てきたら蹴つて遊ぼうと体育の先生は言う  
頭痛はだんだん成長するんだと理科の先生は言う  
夢は野良犬におやいなさいと校長先生は言う  
しかし子供は夢を見てしまう  
だから子供は全員頭痛持ちだ  
小さな頭痛をチケットにして  
長い灰色の旅に出る

